戯れは奇想の跡

同心円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戯れは奇想の跡

【Ｎコード】
Ｎ７４６７Ｙ

【作者名】
同心円

【あらすじ】
ジャーナリスト同好会。
略してＪ会。
連続通り魔事件が全国区のニュースになった頃、奇妙な噂が流れ始めた。
曰く、事件は全て鬼の仕業らしい、と。

この作品は、とあるケータイサイトで僕が同心円として書きかけて止まっていたものをサルベージしたものです。残骸は削除したので確認はできません。
旧タイトル「奇想ノ跡ト鬼爪ノ痕」

True or False

高校生だろうか、日も暮れかけのやや狭い住宅路を二人の女の子が姦しくしゃべりながら歩いている。
「ねえ、知ってる？」
「何が？」
そのうちの一人が唐突に話題を振り、もう一方が聞き返す。周りに人がいないことを除けば、ありふれた放課後の光景、といったところか。しかし、その話の内容は物騒でかつ奇怪なものだった。
「ほらほら、最近起こってる例の通り魔事件、あるでしょ？　あれ、全部鬼の仕業らしいよ」
「何それ、その通り魔事件はニュースになってるし、わたしも知ってるけど、鬼の仕業って？」
「なんか、聞いたところによると、襲われた人はみんな背中に、長い爪で着ている服ごと肉を裂かれたような傷を負ってたんだって」
話す方は徐々に嬉々とした表情に変わる。こういった噂の類が好きなのかも知れない。
「ちょっとやめてよ、想像しちゃうじゃん」
聞く方は逆に恐怖の二文字を顔に浮かべる。こちらは怖い話が苦手なようだ。
「服の上から引っ掻いて肉を抉るなんてすごいよね」
「聞こえませーん」
しかし、角を曲がって公園と池に挟まれた道に入ったところで、二人の表情は最終的に恐怖に統一されることになる。
彼女らが話題にした噂の真偽はともかく、人の死体を発見するという経験は二人にとって初めてのことだったのだから。

火の無い所に煙は立たぬ。
物事には必ず原因と結果がある。原因があるからこそ結果があり、結果があるということはつまり、そこには何かしらの原因があったということを指す。右の諺はそれを的確に表していると言える。
「だから今回はこの鬼について調査するわよ」
覚悟はいいかしら、といろりちゃんは僕を指差す。
鬼。もはや校内の生徒の口に上らないことがなくなった話題。
そもそもの始まりはとある通り魔事件。帰宅途中の女性の背中を切りつけて逃げる、という一般的なもの。幸いその女性は一命を取りとめたものの、重傷で今も昏睡状態だとか。
その事件があってから、この町に住む人が一週間に一人か二人のペースで襲われ続け、被害者の数はすでに6人、いずれも背中から切りつけられて重傷を負っている。実際には事件は夕方に起こるのだけれど、まさに「夜道は一人だと危ないぜ」という感じだ。
その事件が、全て鬼の仕業なんじゃないかという噂が出ている。いや、蔓延している。
「大仰な仕種で宣言するのは構わないけどさ、いろりちゃん。因果応報という言葉を持ち出すなら、結果が噂の流通である以上、原因はただの悪戯かも知れないよね？」
放課後の狭い部室でコンピュータの鍵盤を叩きながら僕は聞き返した。
「昨日はついに死人が出たのよ。しかも発見者はうちの一年生だっていうし。今や校内はこの話で持ち切り。ただ、今日はその子たちは休んでるから話を聞きには行けないけど。それにもし噂がデマだとしても、その噂を流した張本人を暴き出せば小さな記事くらいは組めるじゃない？　私は自分の行動を何一つ無駄にする気はないの」
もっともらしいことを得意げな顔で言ういろりちゃん。
この態度が大きい少女の名前は畑野爐（はたのいろり）。彼女は僕が属する部活の部長だ。とはいっても、僕より数時間早く入部しただけで、経験的

にはほとんど変わらない。態度が大きいのはおそらく性格に問題があるんだと思う。
そして、これが一体何の部活かといえば……。
「生徒間に蔓延る噂の真偽を調査し、正しい情報を生徒に提供する部」
ジャーナリズム同好会。略してJ会。
うちの学校にはないけれど、要は新聞部みたいな活動だと思う。違いは一つ、記事にする内容が校内で噂になっていることのみということだ。
「ここらで一つ、大きな仕事をしないことには新入部員も入ってこないじゃない。J会はとても素晴らしい部活だってことをアピールしないと勧誘のかの字もうまくいかないわよ」
こういう時、時の流れって残酷だと思う。
「ま、部長に言われちゃ反対する気はなくなるけどね。で、どうやって調査するの？」
鍵盤を叩くのをやめて、頭の後ろで腕を組んで伸びをする。椅子が倒れるか倒れないかの限界まで伸びてから体を起こす。
いろりちゃんは少し考える風に首を傾げて、拳の槌を打ってから言った。
「そうだ、張り込みをしよう」
「……それ、いろりちゃんがしたいだけだよね」
「もちろん」
「いや、自信満々に返されても……」
張り込みとは、何か目的の出来事が起こりそうな、もしくは目的の人物が現れそうな場所にあらかじめ待機すること。つまりその出来事や人物にある程度の見当がついていないと、張り込む場所すらろくに決められないのだ。
「そうね、大雑把な情報は莉雨に訊けばなんとかなるでしょ」
「どうだろう、そんなに簡単には教えてくれないと思うけど」
眺莉雨（ながめりう）は、購買でバイトをしている学寮生。どこから仕入れてく

るのか、早く正確な情報をいつも提供してくれる。ただし、絶対に本人が深入りせずに済む程度まで。
僕はもう一度コンピュータの画面を見て、今書き上げた記事の校正を始める。
それにしても、鬼、か……。

僕の名前は篝火守時（かがりびもりと）。「もりとき」と書いて「もりと」と読ませる辺りに僕の両親の名付けのセンスが窺える。いや、別に気に入っていないわけじゃないけれど。百人一首の「みかきもり～」の歌に親近感を覚えたりして。
僕といろりちゃん。今J会に所属しているのはこれで全員だ。たかが二人の同好会に部室とコンピュータがあるのは一つ上の先輩方の活躍のおかげで、そもそも僕もいろりちゃんも別々に先輩に誘われて入部したのだ。
でも今じゃ、部員が少ないせいで部費もろくに入ってない。一口に言えば、潰れかけ。ついこの間まで、いろりちゃんが新入部員の勧誘になぜか乗り気じゃなかったのが大きな原因だ。
まあ、こんなマイナーな部活が潰れていないだけましだとも言えるけど。
「で？　何の用かな？　もちろん予想は付くけどさ、一応聞いておこうじゃないか」
記事の校正が終わって、僕といろりちゃんは購買にやってきた。放課後もすでに午後五時半を回ったせいか並んでいる弁当やパンもほとんどなくなり、心なしか広く感じる店内で莉雨くんは店番をしていた。カウンターの中に簡易チェアを設け、そこに座って本を読んでいる。
「鬼の話は当然知ってるわよね？」
いろりちゃんが尋ねると、莉雨くんは読んでいた本を脇に置いてから、うんざりしたように顔を伏せた。
「……ボクだってね、いつもいつも情報を提供するわけじゃない。

気分が乗らない日だってあるし、忙しい日だってある。例えば今日は店番が終わったら用事があるんだ。しかし畑野爐、情報屋として何の情報も提供してやらないのは気が引ける。だからそうだな、そこにある大豆スティックを一本買ってくれたら鬼にまつわるちょっとした話を提供しよう」

「ちょっとした話？」

「いわゆる回収予定のない伏線、というものだ。この世界が小説だったらね」

回収予定がないなら聞く意味もない気がするけど。

ふむ、と頷いてから、いろりちゃんは指定された大豆スティックを一本手に取り、代金と合わせてカウンターの上に置いた。

莉雨くんはお金をレジに収めてから大豆スティックの袋を開ける。

「まいどあり。そしていただきます。まあ、昨日うちの学校に死体発見者が出たらしいからね。君が来るとは予想していたよ。ただでさえ記事のネタに困っている君たちだ。こんな大きな、いかにもな事件に首を突っ込まないはずがない。大方、ここで活躍してまだ部活に入っていない一年生を捕まえようという魂胆だろう。近頃はどこも人員不足だね。聞いたかい？　野球部はまだ新入部員が五人しか入っていないらしいよ。もう七月になったのにね」

「……喧嘩売ってるの？」

「ああ、ごめん。鬼の話だったね」

莉雨くんは大豆スティックを頬張りながらいろりちゃんに顔を向けて語りだした。

日本の歴史における「鬼」という言葉の意味の細かい変遷を、ボクは寡聞にして知らないけれど、昔の日本人がどういうものを「鬼」と呼んでいたのかは、中学で習う日本史を振り返るだけでも大体の見当は付くと思う。

「鬼」っていうのはつまり、「異物」なんだよ。

今で言う「恐怖の対象」とか、「冷酷な人物」とかはおそらく後

から付け加えられた意味だろう。「異物」にマイナスのイメージしかない以上、鬼もマイナスの意味ばかり付加される。

しかしまあ「異物」という言い方は少しオーバーかもしれない。あくまで少しだけど。

とはいえ、日本人が自分たちと見た目が違う人間のことを「鬼」と呼んでいたということは、すでに確定している事実だ。君たちもこれからは日本の歴史学者に感謝すべきだね。

例を挙げておこうか。手塚治虫の「鬼丸大将」を読んだことはあるかい？　ボクはあの話が大好きなんだけど。平安時代の日本に漂着した外国人の男が日本人の娘と生んだ少年を主人公に据えた物語だ。平将門とか、有名な歴史上の人物も登場する。

そうだね。「鬼」の例で一番わかりやすいのはきっと、いや確実に外国人だ。平均身長の低い日本人には、外国人は巨大に見えただろうし、色の異なる目や髪、毛深い体は獣のようにも見えただろう。

そして、「鬼」とは怖いものなんかじゃない。いや、怖いものでもあったが、それ以上に排除すべきものだった。人の体みたいなものだと思ってくれればいい。白血球たちは体に入った「異物」に対して攻撃するだろう？　「異物の排除」は生きるための行動であり、突き詰めれば本能なんだ。

黒船来航の折に描かれたペルリ像は有名だよね？　阿弓流為（アテルイ）は？

元寇はさすがに知っているか。戦国時代に布教に来たポルトガル人は南蛮人と呼ばれてやしなかったかな？

日本人にとって彼らは全て、「鬼」であり、「異物」であり、完遂未遂に限らず排除の対象で、駆逐の対象だった。

このあたりのことを考えれば、かの有名な「桃太郎」や「泣いた赤鬼」の本当のストーリーが、全く別のものに見えてこないかい？

「とまあ、大豆スティックと引き換えと考えれば、これぐらいかな。ちょっとしゃべりすぎたかもしれないね」

そう言って、莉雨くんはここに来てやっと僕を見た。

「今の話は覚えたかい？」
「え、うん」
「重畳だね。物覚えの悪い上司を持つと苦労するだろう？」
ニヤニヤする莉雨くん。ちらっといろりちゃんを見ると、腕を組んで指をついていた。
「莉雨、やっぱり喧嘩売ってるでしょ」
まあまあと宥めてから僕は答える。
「それもまた、いろりちゃんの魅力なんじゃないかな」
莉雨くんはニヤニヤを一瞬止めてから、またニヤニヤしだした。
僕の顔も自然とにやけてしまう。
「全く、君ってやつは過保護だねえ。畑野爐に決して小さくない嫉妬を覚えるよ」
「あは、そんな馬鹿な」
それじゃ失礼するよ、と言って莉雨くんは店から出て行った。どうやら話している間に勤務時間が終了したらしい。用事があるとも言っていたことだし。
結局、何も教えてくれなかった。莉雨くんの薀蓄が今後の調査に役立つかどうかはともかく、とりあえず手帳にまとめておくとして、今日は帰ることにしよう。
いろりちゃんを振り返ると、彼女はぼうっと大豆スティックを眺めていた。
「閉店ですよ」
「あ、すみません……ってなんだ、守時か」
「帰ろうか」
「そうね」
僕は残っていた店員さんに軽いお詫びのつもりで一礼して、いろりちゃんを後ろから押しながら売店を出た。
噂の調査、開始。

True or False（後書き）

True or False

真偽

今まで一度も死人が出なかった連続通り魔事件だったけれど、ついに被害者が一人亡くなった。その事実は週末になるころには誰もが知っているほどに広まっていた。
「やっぱり尾ひれも付き始めてる。聞いてよ、犯人は小さい女の子とか真顔で言ってる生徒がいたんだよ？」
「それ絶対噂と妄想が混ざってるわね」
校内での調査は噂の回収。どんな内容がどこまで広がっているかをなんと聞き込みをして調べるのだ。噂がある程度広がってしまうとひれがつくのは仕方のないことで、でもなんだかやるせない気持ちになるのは、こういう幼稚な話を信じてしまう人もいるからかもしれない。
ちなみに、噂に尾ひれがつく原因は、自分が知っていて相手が知らないことを教える優越感や、何度も話しているうちにそれが真実だと思い込んでしまう心理。僕もジャーナリストの端くれだから、自分の発言にはしっかり責任を持て、と声を大にして言いたいところだ。言ったら言ったで恨みを買いそうだけど。

そんな訳で金曜日の放課後。
調査結果をまとめ終わった僕は、一応手帳に今回の調査の要点を少しメモして、いろりちゃんを振り返った。
「そうだ、死体発見者の一年生のうち一人が僕の妹と友達でさ、明日の昼にアポ取っといたよ」
デスクで肘をついて顎を手に乗せていたいろりちゃんは、ふうん、と気のない返事をした。
「……やけに手回しがいいじゃない、何かいいことでもあったわけ？」
おっと、どうやら少し機嫌が悪いみたいだ。調査が思うように進

んでいないのがいろりちゃんをイライラさせているのかもしれない。ここは慎重に答えるべきか。
「別に。妹の友達でなきゃこう上手くはいかないよ。向こうも小さくないショックを受けているはずだからね。強いて言うなら、休日にいろりちゃんと会える口実を作れたことが、僕にとっていいことかな」
「取材時は制服着用」
「訂正、ややいいことかな」
さりげなく言ったのにたった一言で一蹴された。タイミングが悪かったのかも知れない。あ、機嫌が悪いんだっけ。
「ま、別に義務じゃないけど」
言ってからいろりちゃんは口をとがらせてそっぽを向く。不機嫌モード進度レベル2。
「……どうしたのいろりちゃん？」
僕が彼女の顔色を窺いながら尋ねると、いろりちゃんはやっぱり肘をつきながら僕をちらっと見た。
「莉雨はこの間デートに行ってきたらしいし」
「なんだって！？」
うわあ、用事ってそれか！　せめて、せめてぐうの音だけは出したいのに、恋人のいない僕からはぐうの音なんて贅沢なものは出なかった。
……そうか。
「それを自慢されて不機嫌に……」
「自慢なんかされてないわよ。本人もさりげなく言っただけだし」
……でも不機嫌になっているのは事実。いろりちゃんも恋人いないからなあ。
いろりちゃんには失恋の経験がある。お相手はＪ会の先輩、いろりちゃんを勧誘したご本人だ。もしかすると、その先輩に近づくために入部したのかもしれない。ただ、その先輩にはすでにお相手がいて、いろりちゃんは告白前にフラれたのだけれど。

なんて、この経験はそのまま僕の経験でもある。つまり分かりやすく言えば、僕を引き入れた先輩と、いろりちゃんを招いた先輩が、相思相愛だったということだ。僕もいろりちゃんも、よくこの部活を続けていられるよなあ。不思議でしょうがないや。
「で？　何時？」
「一時ごろに家に来てくれってさ。条件として、僕の妹同伴。十分前くらいに僕の家に集まれば間に合うよ」
「わかった。……じゃあ帰る」
「え、帰っちゃうの？」
「することもないし」
そう言っていろりちゃんはすたすたと部室を出て行った。相当不機嫌のようだ。……明日までに機嫌治るのかな。

翌日の昼前。
「麻衣、そろそろ電話譲って」
「あ、うん、ちょっと待って。じゃあひっちゃん、後でね」
僕らは今日の予定を確実なものにするために、兄妹それぞれ一本ずつの電話を掛けた。妹は例の友達に、僕はいろりちゃんにだ。
『……何？』
ワンコールで出てくれたくせに、何故かすごく不審そうな声で応答された。
「今日の一時十分前に僕の家に集合っていう約束、覚えてるかな」
『……何で？』
「死体を発見した一年生に会って取材するため」
『……忘れてたわ』
「了解、今から準備して間に合うかい？」
『……余裕』
「ならよかった。よろしくね。じゃあ切るよ」
『……後でね』
僕は宣言通り電話を切った。一連の会話を思い出して、寝てたな、

と確信したのは言うまでもない。昨日夜更かしでもしていたのだろうか。
昼食にパスタをゆでて、温めておいたレトルトのカルボナーラに絡ませる。ビンの中のバジルが残り少なかったので、二人分には少し多いけど全部かけた。
「ひっちゃんが今日は警察の人来ないって言ってた」
フォークに器用にパスタを巻きつけながら、麻衣が電話の内容を報告する。
「その方がありがたいよ。僕といろりちゃんは一度迷惑をかけたことがあるから」
正確には先輩を含めた部員全員が、だけど。今回も捜査の邪魔になることは避けないといけない。
「……警察の御厄介に？」
「違う、それだと家族に説明されてるはずじゃないか」
僕の妹、篝火麻衣（かがりびまい）。変な読み方は僕で終わりにしたのか、「麻衣」は普通に「まい」と読む。歳は一つ下で、同じ高校に通っている。とはいえ、僕は毎朝早めに家を出ているので、一緒に登校したことは一度もないけれど。
何かとすぐ悪い想像をする癖を直せば、可愛い妹なんだけどなあ。まあでも、学校で人の話を聞く限りにおいては、僕ら兄妹は仲のいい方のようだ。誰だったかは妹に耳を噛み千切られたと言うし。鉄梃（てこ）で寝首をかかれそうになった人もいたかな。
「それはともかく、部活のことに付き合わせることになっちゃってごめんな」
「ノープロブレム！　最初から予定なかったし。強いて言うなら、家でゴロゴロする予定だった」
典型的な暇人なのさ！　と、麻衣は勢いよく親指を立てて見せた。そのジェスチャーは使いどころ間違ってるけど。
ところが、麻衣は急に表情を暗くした。
「ひっちゃんさ、やっぱりまいっちゃってる感じなんだよね。もし

かしたら今日もまだうまく話せないかも」
「……それは分かってるよ。きっと警察も待つつもりで事情聴取に伺わなくなったんじゃないかな」
「うん。わたしもそう思う」
　こういう真剣な様子を見ていると、麻衣は優しいな、と心から感じる。きっと、予定が入っていたって僕の取材に付き合い、友人の身を案じて唸ったり顔をしかめたりしていただろう。ちょうど今みたいに。
　その点、僕は薄情だよなあ。取材日程をできるだけ早く取れるように希望したり、簡単に妹をまきこんだり。これはもう、妹の爪の垢を煎じて飲まなきゃ治らないレベルだろう。戯言じゃなくて、本気で。
「……ひっちゃん、狙われたりしないよね？」
　と、心配そうに、いや、実際に心配してるんだろうな、麻衣が僕の顔を見て呟いた。
「大丈夫だよ、死体を見ただけで犯人を見たわけじゃないし。何より、今狙うと警察のガードの中に飛び込んでいくようなものだからね」
「でも、犯人が馬鹿だったらそういうことも分からないかもしれないし……」
　ぽんっと、僕は言葉を遮るようにテーブル越しに麻衣の頭に手を置く。麻衣は、少し震えていた。
「大丈夫だから」
「……うん」
「もし犯人が馬鹿だったら今まで捕まってないことの説明がつかないだろ？」
「……うん、ありがと」
　震えがにわかに止まる。どうやら落ち着いたようだ。
「よし、落ち着いたらちゃんと食べないとな。今日はこの後一仕事あるんだし」

麻衣は、うん、と頷いてから、一仕事？　と首を傾げた。
「……時兄、下着ドロは犯罪だよ？」
「知ってるよ！　何？　麻衣には僕が下着ドロをする人間に見えるわけ？　取材だよ取材、麻衣も行くだろ？」
「……」
「黙るな！　あ、さてはお前さらに悪い方向へ想像をシフトさせてるだろ！」
とはいえ、下着ドロより変態な犯罪なんて限られてくる。
「違うもん！　わたしは時兄が取材と称してひっちゃんを盗撮したりするとは思ってないもん……」
「予想以上に酷かった！　ていうか喋りながら自信なくすなよ！」
そもそも昼食時にする話題ではなかった。もしかしたら麻衣は、取材の手伝いってだけでテンパっているのかもしれない。僕もＪ会に入部した当初はテンパってたし。
脱線した会話を切って食事を再開した頃には、カルボナーラは既に冷めていた。たった一つ違いとはいえ、手のかかる妹はいつまでも手のかかる妹だった。

昼前まで寝ていたらしいいろりちゃんだけど、時間通りの五分前に僕の家に集合してくれた。余裕というのは本当だったみたいだ。
「制服だね」
「制服よ」
とりあえず、会って最初の会話が下心丸出しだった。いや、確かに僕も制服を着てるんだけど。
「まあ、取材の後は学校行かなきゃだからね、当然と言えば当然なんだけど。昨日の会話の感じでは私服で来てくれそうだったから。多少なりとも期待していた僕は今しばし落胆の感情を抑えきれないというかなんというか……」
「あ、そ」
残念、あれはただの口から出まかせだったようだ。

「いろりさん、今日はよろしくお願いします」
「よろしくね」
「本当のことを言うと、わたしはあまり乗り気じゃないんですけどね」
「そうね、私もよ」
なぬっ？　言い出しっぺはいろりちゃんなのに。乗り気じゃなかったんなら最初から言っといて欲しいよ全く。
とりあえずここに、僕、いろりちゃん、麻衣のちぐはぐな三人組取材チームが出来上がった。

その一年生の名前は比津（ひつ）さんといった。
麻衣がインターホンを鳴らし、来たよー、とマイクに向かって極力明るい声を出す。インターホン越しに聞こえた彼女の声は、まるで比津さんの弱さをそのまま音にしたかのようだった。
ほどなくして、玄関扉の鍵が開く音がする。中から出てきたのは、いろりちゃんと同じく制服姿の女の子。僕は一応電話で話したことはあったけれど、対面したのは初めてだ。
「へ？　あれ？　私服なのわたしだけ？　もしかしてこれってわたし仲間外れにされちゃってたりするのかな……」
「ストップ。そんなわけないだろ。僕ならともかく、優しい麻衣を仲間外れにして誰がいい思いをするんだよ。お前が戸惑うと比津さんも戸惑っちゃうだろ？」
「そ、そっか、そうだよね、えへへ、ありがと」
「そこ、見せびらかさない」
背中越しに感じるいろりちゃんの視線が心なしか冷たかった。
「ふふっ」
比津さんがクスッと笑った。僕らのやりとりが面白かったのだろうか。確かに麻衣といろりちゃんの掛け合いなら芸になるかもしれない。
とりあえずまだ笑ってる比津さんに家の中に通してもらう。

「今日訪問させてもらったのは、事前に電話で話した通り、目撃した死体について話を聞かせてもらうためだよ」
「時兄、グイグイくるね」
「適当なことを言うな」
茶化す麻衣を叱ると、
「妹を叱るなんて、無駄にお兄さんぽいことをするのね」
いろりちゃんにからかわれた。じゃあどうしろと？
「あ、あの、話しますから喧嘩しないでください」
緊張しているのか、怯えているのか、震えた声で僕らの仲裁をしてくれる比津さん。こんないたいけな子に気を使わせてしまうとは。酷いことをしたなあ、と今更思う。
「ジャーナリスト失格ね」
「いろりちゃんが言うと僕を馬鹿にしているようにしか聞こえないのは何故だろう」
「馬鹿にしてるからよ」
「ですよねー」
酷いのはいろりちゃんの性格だった。
僕らの顔色を窺いながら、比津さんは語り始めた。
「あの日は友達と二人で帰宅してたんです。部活の帰りでした……」
帰る時間が夕方頃になったのはいつも通りのことらしい。だからその日も特に注意はしておらず、むしろ一緒に帰っていた友達が噂を話し始めるまで忘れていたくらいだったとのことだ。
俗に逢魔が時と言われる時間帯。
ただ言われているというだけであって、その言葉自体には意味がないのでここでは特に説明しないが、例の通り魔が人を襲うのはいつもこの時間帯だったらしい。病院に運ばれた被害者の中にも、すでに意識回復している人はもちろんいて、口を揃えて夕方に襲われたと証言しているそうだ。
比津さんの話に戻る。
彼女たちが帰宅途上、死体を発見したのもちょうど日が落ちる頃

だったそうだ。比津さんも彼女の友達も怖くてへたり込んでしまい、しばらくして通りかかった人に助けを求めるまで、立ち上がることすらできなかったという。時間帯を考えれば、彼女らが犯人に遭遇しなかったのは本当に幸運だったと思える。

そこで二人が発見した死体は……。

「背中に……三本の太い傷があって……肉が……」

そこまで言ったところで彼女は、顔を覆うように手を当ててブルブルと震え出してしまった。その時のことを思い出してしまったのかもしれない。やはりまだまともに話せるほどに落ち着いてはいないようだ。

「怖いのに話してくれてありがとう。もういいから、落ち着いて休みなさい」

「すみません……」

むしろここまで真剣に協力してくれるだけでありがたい。J会がまともに取り合ってもらえたことなんて数える程しかないからね。莉雨くんもこの子も、その意味で貴重な協力者と言える。

麻衣がついていてあげたいと言ったので、僕といろりちゃんは二人を残して学校に行くことにした。今日聞いた話をまとめてパソコンに保存しておくためだ。

「本当にすみません……」

比津さんが何度目かの謝罪の言葉を口にした。僕は極力優しい笑顔を浮かべて言葉を返す。

「気にしなくていいから、比津さんは何も悪くない」

「そうだよ、悪いのは犯人だから」

麻衣もしっかりとフォローを入れる。あとは麻衣に任せてもよさそうだ。

「三本の傷……ね」

学校への途上。いろりちゃんが眉間にしわを寄せてつぶやいた。

「うん。今まで集めた情報にはそこまで細かい内容はなかったね」

「今まで話題に上らなかった新しい情報ってのが気になるわね……」
新しい情報。タイミングで言えば、僕らが調べ始める前日に確定した情報ということになるけれど。新しい情報、ねえ。
「どうかな。爪が指の先にある以上複数本の傷ができるのは必然だと思うけど。僕にはそこまで重要な情報とは思えないなあ」
そもそも、比津さんも別に意識して言ったわけじゃなさそうだったし。
「これはもしかすると、……もしかするかも」
それでも、いろりちゃんはそこに、何か不穏なものを感じ取ったみたいだった。

the Motley Trio（後書き）

the Motley Trio

ちぐはぐな三人組

"Talking to Myself"

畑野爐も大概だけれど、篝火守時も大概だよね。とボクは呟いた。いわゆる独り言だ。

もちろん、手に入れた情報は何よりの武器だし、ジャーナリストなら情報こそが命くらいの気構えで活動するのも間違いではないと思う。が、たかが噂にぐるぐる振り回されるのは愚かだよ。

彼らはもっと「入ってこない情報」の価値を知るべきだ。

事件の報道の内容はちゃんと理解しているのだろうか。内容を記憶するだけじゃ役に立たない。簡単にまとめて暗記した程度で理解したと思い込んでいてはダメだ。

ボクは多少なりとも彼に期待しているので、やはり自分で気づいて欲しい。

畑野爐は……論外だ。記憶力皆無、短絡思考、唯一使えるのは若干鋭い第六感だけ。囮作戦とか言って犯人に襲われれば多少は頭を使うようになるかもしれない。人生の教訓の大半は自分や周りの失敗だからね。

あの二人がボクの思考を覗けたなら、きっとこの事件に首を突っ込んだりしないだろうに。

学生寮の自分の部屋で、課題をたんたんとこなしながら、ボクの独り言はJ会の悪口へとシフトする。

あの二人の先輩とやらに会ったことが一度だけある。美男子と美少女と小人。小人は背が低いことを除けば誠実そうで真面目そうないい部長だった。

だけどあとの二人は……。

制服のポケットに入れっぱなしだったケータイが鳴った。メール着信。女性歌手は大半嫌いだけれど、カーペンターズは好きだ。小学校の頃から聞いているので歌声が染み付いているのかも知れない。

メールは恵さんからだった。文面を見て納得する。

ボクは一言、ほうっておいてください、と打って返信した。

"Talking to Myself"（後書き）

”Talking to Myself”
いわゆる独り言

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7467y/

戯れは奇想の跡

2011年11月27日03時50分発行